

令和4年度 学校評価

愛南町立一本松小学校

[評価基準 A:目標を達成 B:目標値の8割以上達成 C:目標値の6割以上達成 D:目標値の6割未満] 【アンケート結果 4:そう思う 3:ややそう思う 2:あまわ思わない 1:思わない】

重点目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察 ◆改善方策	評価資料	アンケート結果(%)				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
1 確かな学力の定着と向上	(1)	基礎的・基本的事項の定着ができたか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。	中間期	B	◇全体的に目標値を下回っており、特に教職員の基礎・基本事項の定着の肯定割合が、目標値を23.3%下回る結果となっている。教職員は、一時間及び単元毎の評価から、基礎的・基本的事項が身に付いていないと感じている。 ◆児童と目標を共有した上で、スモールステップで、着実に基礎・基本事項の獲得を図っていく。	教職員アンケート① 基礎・基本事項の定着	10.0	80.0	10.0	0.0	90.0	88.8
				年度末	B	◇中間期に比べるとよい傾向にあるが、家庭の肯定率が低く、学校と家庭との思いに違いがあると感じる。 ◆今後も、目標を明確にして、着実に基礎・基本事項を身に付けさせるとともに、家庭学習を工夫し、家庭との連携を図る。	児童アンケート① ねらい理解	54.3	33.9	7.9	3.9	88.2	
							児童アンケート② 授業内容理解	59.8	29.1	8.7	2.4	89.0	
						保護者アンケート① 授業内容理解	22.2	60.7	15.4	1.7	82.9		
	(2)	学ぶ楽しさやできるようになった自分に気付かせる学習の充実に努めたか。	教職員、保護者、地域住民の90%以上が肯定している。 対話的な学びの実施率が90%以上	中間期	B	◇児童も保護者も、コンピュータなどを使った学習に対する肯定割合が非常に高く、ICT教育が着実に浸透している様子がうかがえる。一方で、教職員の分かる授業実施の肯定割合が低く、ICTを教育現場で生かすために試行錯誤している様子がうかがえる。 ◆今後も、教職員のICT活用指導力の向上を図りながら、主体的対話的で深い学びの充実に努める。	児童アンケート③ コンピュータ学習	78.7	15.0	3.1	3.1	93.7	94.2
				年度末	A	◇保護者、地域の肯定割合が高く、ICTを活用した授業の充実が図られている。 ◆今後も、継続して授業改善に取り組み、主体的、対話的で深い学びの充実に努める。	教職員アンケート② 分かる授業の実施	30.0	60.0	10.0	0.0	90.0	
							保護者アンケート② コンピュータ学習	46.2	47.0	5.1	1.7	93.2	
							地域アンケート① 分かる授業の実施	76.5	23.5	0.0	0.0	100.0	
								対話的な学び(郡教研の研究推進)の実施率				93.8	
	(3)	基礎と応用のバランスの取れた学習展開、学び合う場の確保など、授業改善に努めたか。	教職員の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇指導と評価の一体化及びICT機器の活用のどちらも、高い肯定割合を示している。特にICT機器の活用については、教員間でのスキルの共有化を図りながら、積極的な活用の促進が図れている。 ◆今後もPDCAサイクルを生かした授業改善に努める。	教職員アンケート③ 指導と評価の一体化	10.0	80.0	10.0	0.0	90.0	95.0
				年度末	A	◇中間期と同様に、高い肯定割合を示している。熱心に授業研究に取り組み、指導方法の改善が図られた。 ◆今後も継続して、PDCAサイクルを生かした授業改善に努める。	教職員アンケート②① ICT機器の活用	54.5	45.5	0.0	0.0	100.0	
	(4)	家庭学習の習慣化・充実に努めたか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。 学年ごとに設定した家庭学習時間の達成率が80%以上(←振り返りカードにおける実施率)	中間期	C	◇いずれの項目も目標値を下回っており、特に教職員と保護者の肯定割合が低い。家庭での学習時間はある程度確保されているものの、質的な充実には結びついていないことが評価を下けている要因と考えられる。 ◆宿題の取り組み方について、発達段階に応じて指導する。また、ゲーム等の時間が増えているので、家庭への啓発を継続して行っていく。	教職員アンケート④ 家庭学習の習慣化	30.0	50.0	20.0	0.0	80.0	78.1
				年度末	B	◇中間期同様、どの項目も目標値を下回っている。特に児童と保護者の肯定率の差が大きい。保護者は、家庭での児童の様子から、家庭学習ができていないと感じている。 ◆長時間ゲームをしている児童もいるので、学年通信などを通して、家庭との連携を図り、家庭学習の充実を目指す。	児童アンケート④ 家庭学習の実施	51.2	33.1	11.0	4.7	84.3	
							保護者アンケート③ 家庭学習の実施	29.9	36.8	29.1	4.3	66.7	
								学年ごとに設定した家庭学習時間の達成率(健康観察による)				81.5	
(5)	読書活動の推進に努めたか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。 各自の読書目標達成率が80%以上(←振り返りカードにおける実施率)	中間期	C	◇保護者の肯定割合が、教職員、児童と比べ特に低くなっている。学校で読書に親しむ姿を見ている教職員に対し、保護者が、家庭での少ない読書時間を基準に回答しているためだと考えられる。 ◆各自の読書目標を達成する取組を今後も継続し、学校での読書への取組状況を共有する。	教職員アンケート⑤ 読書活動の推進	20.0	60.0	20.0	0.0	80.0	63.0	
			年度末	C	◇読書貯金については、一部の児童は熱心に取り組むなど効果があったが、読書にあまり興味がない児童については、読書量の増加につなげることができなかった。また、中間期同様、保護者の評価も低かった。 ◆読書カードの効果的な活用を図る。読書目標達成率については、一人一人に合った適切な目標設定をさせたり、月ごとに多読賞の児童を表彰するなどの取組を行うことで読書への意欲を高めていく。また、保護者への啓発に努める。	児童アンケート⑤ 読書活動の実施	42.5	29.1	18.9	9.4	71.7		
						保護者アンケート④ 読書活動の実施	18.8	21.4	37.6	22.2	40.2		
							読書カードによる各自の読書目標達成率				60.2		
中間期	学校運営協議会の所見		児童の肯定率に比べ、教職員と保護者が低い傾向が見られる(特に家庭学習と読書活動)。児童の立場からすると、もう少し自分たちの頑張りに目を向けてほしいと思っているかもしれない。教職員アンケートの4評価の割合がもう少し高くてもよいのではないかと。より高みを目指している先生方の姿勢が感じられる。			学校の対応		確かな学力の向上に向け、研修等の充実を図り、基礎的・基本的事項の定着を目指し授業改善に努めていく。家庭学習や読書活動については、児童の頑張りを認めたり家庭へ発信したりしながら、連携して取り組む。					
年度末	学校運営協議会の所見		児童が興味を持ったものをきっかけとして、本を読む、調べるといった導き方ができないか。読書環境づくりを保護者にも働きかける必要があり、読書ができたかどうかではなく、子供に働きかけたかどうかを評価してはどうか。公民館事業を活用し、地域においても親子で本に親しむ活動の推進を図りたいと考えている。			学校の対応		学校における読書貯金等の読書活動推進の取組を、ホームページや通信等を活用して積極的に発信する。また、親子で読書に親しむ活動の提案や公民館行事を活用した読み聞かせ会等の活動など、学校と家庭、地域が連携して読書環境づくりに努める。					

重点 目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察 ◆改善方策	評価資料	アンケート結果(%)				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
2 豊かな心を育む教育の推進	(6)	体験活動や地域の人材を生かした道徳教育を推進したか。	教職員、児童、保護者、地域住民の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇コロナ禍の中にあっても、感染対策を取りながら地域と協働で体験活動に取り組んだことが、高評価につながっている。 ◆今後も体験活動の充実を図るとともに、参観日等を活用し、地域の人材を生かした道徳教育の推進に努める。	教職員アンケート⑩ 体験活動、地域人材	0.0	90.0	10.0	0.0	90.0	93.2
				年度末	A	◇中間期に引き続き、体験活動や地域の人材を生かした活動に取り組み、そのことが高い肯定率につながっている。また、赤十字の活動も浸透しつつあることが結果に結び付いていると思われる。 ◆今後も体験活動や地域の人材の活用、赤十字の活動を充実させ、道徳教育の推進に努める。	保護者アンケート⑩ 保護者・地域との協力	47.0	48.7	2.6	1.7	95.7	
							保護者アンケート⑩ 道徳教育の取組	31.6	60.7	7.7	0.0	92.3	
				年度末	A	◇中間期に引き続き、体験活動や地域の人材を生かした活動に取り組み、そのことが高い肯定率につながっている。また、赤十字の活動も浸透しつつあることが結果に結び付いていると思われる。 ◆今後も体験活動や地域の人材の活用、赤十字の活動を充実させ、道徳教育の推進に努める。	地域アンケート⑦ 地域人材の活用	73.7	21.1	5.3	0.0	94.7	
	教職員アンケート⑪ 命に関する授業実践	36.4	54.5				9.1	0.0	90.9				
	(7)	自他の命を大切にすることを推進したか。	教職員、児童の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇教職員、児童、保護者全てにおいて、高い肯定割合を示している。全教育活動を通じて自他の命を大切にする教育が行われている。 ◆今後も、全教育活動を通じて、それぞれの発達段階に応じ、継続的、系統的に命の大切さを学ぶ機会を確保していく。	児童アンケート⑪ 命を守る	87.4	11.0	0.8	0.8	98.4	95.9
				年度末	A	◇教職員、児童のみでなく保護者においても高い肯定率となっている。自他の命の大切さを学び、それが実践にも結び付いている。 ◆今後も全教育活動を通じて、継続的、系統的に自他の命の大切さを学ぶ教育の推進に努める。	保護者アンケート⑧ 命を大切に	74.4	23.9	0.9	0.9	98.3	
	(8)	全教育活動を通して、児童の自尊感情を高めたか。	教職員、児童の90%以上が肯定している。	中間期	B	◇教職員の肯定割合が100%に対し児童の肯定割合が72.4%と、認識の違いが生じている。教職員は、肯定的な評価や言葉掛け等に努めているが、児童の自尊感情を高めるまでには至っていないことがうかがえる。 ◆今後も、児童を肯定的に評価し言葉掛けを行い、子供たちの良さが生かせる場の確保や認め合う場づくりに努める。	教職員アンケート⑫ 自尊感情の向上	9.1	90.9	0.0	0.0	100.0	86.2
				年度末	B	◇中間期と同様、児童における自尊感情は7割が肯定、3割が否定的なものであった教師も様々な場面を通じて働きかけを行っているが、結果に結び付かない。 ◆意図的に具体的な称賛や言葉掛けなど、一人一人の児童への支援を充実させるとともに、互いを認め合えるような学級づくりに努める。	児童アンケート⑫ 自尊感情の育成	58.3	14.2	14.2	13.4	72.4	
	中間期	学校運営協議会の所見	コロナ禍の中、体験活動や地域の人材を生かした道徳教育の推進のA評定はすばらしい。自尊感情の児童の肯定率が教職員に比較して低いが、4評価の58.3%に着目したい。児童の6割が「自分が好き」と答えている点を評価してもよいのではないかと。今後も継続した児童への関わりを期待したい。				学校の対応	今後も感染対策を講じながら、体験活動の充実を図っていく。自尊感情の評価が低かった児童については、教育相談等の場を活用するなどして信頼関係を深め、子供たち一人一人の良さが生かせる場の確保や認め合う場づくりに努める。					
年度末	全体的に教職員の肯定率は高いが、ほとんどが3評価で、もっと自分たちの指導に自信を持ってよいのではないかと。アンケートで、自分を好きと答えられなかった児童がいたが、自分が好きになれず辛い思いをしている児童を見付け、手を差し伸べることに意味があるので、一人一人丁寧に対応していく必要がある。				感染対策を講じながら、体験活動や地域の人材を生かした活動に取り組むことができた。この成果を生かし、今後も地域の人的・物的資源を活用した有意義な体験活動の充実を図っていく。また、自尊感情の低い児童については、引き続き教育相談等によるきめ細かな支援を行うとともに、学級や学校全体の支持的風土づくりに努める。								

重点 目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察 ◆改善方策	評価資料	アンケート結果(%)				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
3 人権を尊重する教育と生徒指導の徹底	(9)	集団の中で一人一人が生きて仲間づくりに努めたか。	教職員の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇縦割り班活動を軸に異学年間の「つながり」づくりに努めた結果、教職員の肯定割合が100%という結果であった。しかし、児童の学校生活への満足度にはつながっておらず、継続した取組が必要である。 ◆教職員が、一人一人の児童の実態を丁寧に把握し、それぞれの良さを生かした学級経営に努める。	教職員アンケート⑧ 仲間づくりの育成	50.0	50.0	0.0	0.0	100.0	93.7
				年度末	A	◇総合的な評価としてはA評価になるが、中間期の評価と比較すると、教職員アンケートと児童アンケートの「4」評価が下がった。仲間づくりを目的とした児童会活動と赤十字活動を平行しながら他者の思いに「気付く」児童の育成の在り方に課題があると思われる。 ◆規範意識の育成に重点を置いた学級経営の見直しを進めるとともに、2月の初めに全校的な教育相談を行い、ピックアップできた課題については全教職員で共有しながら組織的な解決を図る。	児童アンケート⑩ 学校が楽しい	69.3	18.1	6.3	6.3	87.4	
	(10)	思いやりのある温かい集団づくりに努めたか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇児童、保護者、教職員全ての肯定割合が高い結果となっている。いじめの未然防止、早期発見、早期解決に向けて、教職員間で情報を共有し、共通認識を持って対応したことが高評価につながっている。 ◆教職員が、今後も、学級や学校の支持的風土の醸成に努めるとともに、必要に応じて教育相談等を行うなど、迅速な対応を心掛ける。	教職員アンケート⑨ いじめ、不登校等の取組	45.5	45.5	9.1	0.0	91.0	92.9
				年度末	A	◇学級経営の在り方に課題が見付かった学級があり、安全・安心な学校の雰囲気維持できていなかったと考えられる。児童の内面の成長を促す指導が十分でなかった点が、教職員アンケートの結果にも表れている。 ◆教育活動全体を通して、よりよい集団をつくるために、人と進んで関わる意義や具体的な行動について指導するとともに、学級や学校で同じ目標に向かって成長しようとする活動など工夫して取り組む。	児童アンケート⑩ 友達と仲よく	81.1	11.8	3.9	3.1	92.9	
	(11)	基本的な生活習慣を身に付けさせ、規範意識を育てたか。	教職員、児童、保護者、地域住民の90%以上が肯定している。	中間期	B	◇全体的に肯定割合が高くなっており、中でも挨拶の肯定割合が、児童、保護者、地域において90%を超えるなど、高評価となっている。「挨拶・返事・靴そろえ」のスローガンの元、それぞれの立場で継続的な働きかけや指導を行ったことによるものと考えられる。 ◆基本的な生活習慣や規範意識は、学校、家庭、地域が一体となって取り組む必要がある。通信やホームページ、協議会等を活用して、現状を発信するとともに啓発に努める。	教職員アンケート⑥ 挨拶・返事	18.2	81.8	0.0	0.0	100.0	88.0
							教職員アンケート⑦ 基本的な生活習慣育成	9.1	63.6	27.3	0.0	72.7	
							児童アンケート⑥ 挨拶	75.6	20.5	3.1	0.8	96.1	
							児童アンケート⑦ 返事	52.0	36.2	9.4	2.4	88.2	
				児童アンケート⑧ 早寝・早起き・朝ご飯	55.1	31.5	7.1	6.3	86.6				
				児童アンケート⑨ 忘れ物	62.2	24.4	8.7	4.7	86.6				
				保護者アンケート⑤ 挨拶	44.4	48.7	6.0	0.9	93.2				
保護者アンケート⑥ 返事				29.1	54.7	14.5	1.7	83.8					
中間期	学校運営協議会の所見	仲間づくり・集団づくりはA評定だが、評価が低い極少数の児童に目を向けて支援してほしい。基本的な生活習慣は、B評定だが成果指標であるにもかかわらず、88.5%は評価すべき。「挨拶・返事・靴そろえ」はよいスローガンである。基本的な生活習慣の形成に向け、学校・家庭・地域が一体となり根気強く取り組んでほしい。	学校の対応	今後実態把握や教育相談など生徒指導とも関連させながら、一人一人を生かした学級経営を目指し、学校全体で支援をしていく。基本的な生活習慣や規範意識は、学校・家庭・地域が一体となって取り組む必要があるため、あらゆる機会を通じて現状を発信するとともに啓発に努める。									
					年度末	赤十字の取組や一人一人を大切にしている学級・学校経営など、日々の地道な積み重ねが成果につながっている。児童には、自分たちの笑顔や挨拶が、地域の者にどれだけ元気を与えているか実感できるような指導をしていただきたい。	一本松小学校に伝統的に受け継がれている「松の子の八つの子かい」を指導の軸とし、学校全体で、基本的な生活習慣や規範意識の醸成を図っていく。また、個別課題については、一人一人の実態に応じた指導支援を行い、成果と課題を家庭と共有しながら対応する。						

重点 目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察 ◆改善方策	評価資料	アンケート結果(%)				肯定率(%)	平均(%)	
								4	3	2	1			
4 健康・ 安全 教育の 推進	(12)	家庭と協力して健康的な生活習慣の定着を図れたか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。	中間期	B	◇教職員による健康指導は、肯定割合が100%と高くなっているのに対し、児童、保護者の肯定割合が目標値を下回っている。また、好き嫌いなく食べること、歯磨き・手洗い・うがいについての肯定割合が、児童に比べ保護者は10%程低くなっている。学校でできていることが、家庭でできていない実態がうかがえる。 ◆学校での取組が、家庭でも十分生かされるよう児童に働きかけるとともに、保健だより等を通じて保護者への啓発を行っていく。	教職員アンケート⑬ 健康指導	36.4	54.5	9.1	0.0	90.9	80.3	
							児童アンケート⑬ 外遊び	36.2	24.4	17.3	22.0	60.6		
							児童アンケート⑭ 好き嫌いなく食べる	46.5	35.4	11.8	6.3	81.9		
				年度末	B		◇「休み時間の外遊び」について児童の自己評価が低いのは、学習活動や係活動を優先し昼休み以外に外で遊ぶことが少なくなったためと思われる。しかし、「好き嫌いなく食べる」項目に関して児童の自己評価が低いのは問題で、家庭と連携して改善する必要がある。 ◆学校と家庭において食育の指導内容を共有したり、健康と食の関係について興味を持たせるような給食時間の持ち方を工夫する。	児童アンケート⑮ 歯磨き・手洗い・うがい	78.0	15.7	3.9	2.4		93.7
								保護者アンケート⑫ 好き嫌いなく食べる	32.5	38.5	22.2	6.8		70.9
								保護者アンケート⑬ 歯磨き・手洗い・うがい	35.9	47.9	15.4	0.9		83.8
	(13)	自ら安全のための行動に結びつける判断力と実践力を養えたか。	教職員、児童、保護者、地域住民の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇交通安全教室や避難訓練の実施により、全体的に高い肯定割合になっている。予告なしの避難訓練においては、緊急地震速報に素早く反応し、身を守る行動を取ることができるなど、訓練や学習の成果が日常的に生かされている。 ◆本校は校区が広く、交通量の多い道路もあり、継続した安全指導が必要である。見守り隊を含む地域と連携を充実し、安全教育の推進を図っていく。		教職員アンケート⑭ 安全に関する実践力	27.3	63.6	9.1	0.0	90.9	95.3
								児童アンケート⑯ 自転車・登下校	85.8	12.6	0.8	0.8	98.4	
				年度末	A			◇毎週ある一斉下校における継続的な交通安全への啓発や避難訓練時の指導などにより、児童の危機回避能力は高まっていると思われる。地域や保護者の評価は児童評価と差があるが、概ね良好だと言える。 ◆自然災害だけでなく日常的な交通災害については、特に自転車の乗り方や交通量の多い道路の渡り方についてさらなる指導が必要である。学んだことが、次年度に引き継げるよう、学級指導の徹底を図りたい。	児童アンケート⑰ 命を守るための行動	87.4	11.0	0.8	0.8	
							保護者アンケート⑭ 安全行動		63.2	30.8	6.0	0.0	94.0	
保護者アンケート⑮ 自転車・登下校	50.4	44.4	4.3	0.9	94.9									
地域アンケート③ 安全な登下校	70.0	25.0	5.0	0.0	95.0									
中間期	学校運営協議会の所見	生活習慣の形成に重点をおいている学校の取組が分かる。学校・家庭・地域の連携が欠かせず、また根気が必要である。さらなる向上を目指し、啓発と指導を継続してほしい。安全のための判断力と実践力の育成はA評定であるが、予期せぬ災害や事件・事故が多発している。年間を通して計画的・日常的な指導をお願いしたい。	学校の対応	学校での学びを家庭でも生かされるよう児童に働きかけるとともに、通信やホームページ等を通じて保護者への啓発を行う。安全教育については、避難訓練等を通じて、災害や事件・事故発生時の行動を想定した判断力や実践力の育成を図る。										
年度末		健康や安全に関する指導を確実に行ったかという項目の教師の肯定率が9割を超え、しっかりとした指導が児童の高評価につながっているのではないかと。今は何が起きるか分からない時代であるので、危機に対応できる力をしっかりと身に付けさせていく必要がある。		地震など特定の災害だけではなく、日常的な安全行動が身に付くよう、一斉下校や学級指導の場を有効に活用し、対応力を高めていく。特に訓練では、マニュアルを踏まえた上で、学校全体の組織力を生かしながら体制を整えるよう、教職員も児童も、気付き、考え、実行できる対応力の向上を図っていく。										

重点 目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察 ◆改善方策	評価資料	アンケート結果(%)				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
5 教職員の 資質と 指導力の 向上	(14)	子どもの心に響く教職員としての優しさと厳しさを発揮したか。	教職員の90%が肯定している。	中間期	B	◇肯定割合は目標値を下回っているものの、「そう思う」と回答した教職員が多く、教職員間で情報共有を図りながら、適切な指導・支援に努めたことがうかがえる。 ◆善悪の区別がしっかりとつき、適切な言動が取れるよう、今後も全校体制で共通理解を図りながら指導に当たる。	教職員アンケート⑯ 指導力	63.6	27.3	9.1	0.0	90.9	90.9
				年度末	A	◇肯定割合は、目標値を達成しており、中間期に引き続き、教職員間で情報共有を図りながら、優しさと厳しさを持って指導・支援に努めた。 ◆「してもいいことと、してはいけないこと」をはっきりさせ、今後も全校体制で共通理解の下、根拠を持って指導に当たる。							
	(15)	人間としての幅広い教養や人間性を豊かにするための専門的・実践的な研修に努めたか。	教職員の90%が肯定している。	中間期	A	◇青少年赤十字研究推進校としての取組を軸に、校内研修を充実させ、研究授業や環境整備等に全校体制で取り組むことができた。夏季休業中には、授業力の向上を目指し、スキルアップ研修に計画的に取り組んだ。 ◆研究授業からの学びを全教職員で共有しながら、専門性の向上に努める。	教職員アンケート⑰ 研修や自己研さん	18.2	72.7	9.1	0.0	90.9	95.5
				年度末	A	◇青少年赤十字研究推進校として、研究授業や環境整備に全校体制で取り組み、授業力の向上やスキルアップに努めた。 ◆青少年赤十字の実践や研究授業からの学びを全教職員で共有し、個人の資質能力の向上を図る。							
	(16)	自分の健康に配慮して能率的に仕事をするように努めたか。	教職員の90%が肯定している。 毎月の超過勤務時間が45時間を超えない教職員の割合90%以上	中間期	C	◇教職員の多くが、健康に配慮して仕事をすることができたと回答しているが、8割の教職員が目標時間を超えて勤務している現状にあり、改善が必要である。 ◆協働したり能率的に仕事を進めたりするなどして、勤務時間を意識して働く。	教職員アンケート⑰ 働き方	18.2	72.7	9.1	0.0	90.9	66.3
				年度末	C	◇健康に配慮して仕事をすることができた教職員は目標値を上回っているが、超過勤務を時間が45時間を超えている教職員が中間期よりも改善されているものの、約6割であった。 ◆協働したり、個人の処理能力を高めたりして勤務時間を意識して働く。							
	(17)	情報モラルやICT教育の推進に努めたか。	教職員、児童、保護者の90%以上が肯定している。	中間期	B	◇ICTを活用した授業実践だけでなく、情報モラルの指導についても意識して行っている。ゲーム等のルールについては、児童の意識と保護者の意識に大きな隔たりがあり、保護者にとってゲーム時間が課題となっていることがうかがえる。 ◆児童については、引き続き発達段階に応じた情報モラル教育を実施していくとともに、保護者にも学校で取り組んだ情報モラルの指導についての発信をしていく。	教職員アンケート⑳ 情報モラル教育の実践	9.1	90.9	0.0	0.0	100.0	90.6
							教職員アンケート㉑ ICTを活用した授業実践	54.5	45.5	0.0	0.0	100.0	
				年度末	A	◇ICTを活用した授業実践は浸透してきている。ゲーム等のルールについては、依然として児童の意識と保護者の意識に大きな差があり、家庭への啓発が必要である。 ◆学校医講話や、学級活動等で、児童への意識付けをすることはできたので、今後は実践につなげる手立てを考えていく必要がある。	児童アンケート⑱ ゲーム等のルール	69.3	21.3	5.5	3.9	90.6	
							保護者アンケート⑲ 携帯・ゲーム等のルール	27.4	44.4	24.8	3.4	71.8	
中間期	学校運営協議会の所見	全体的に厳しい評価結果となっている。仕事量と勤務時間の調整の困難さを感じる。健康を害さず勤務していただきたい。家庭では、情報モラルとしてのゲーム時間が課題となっている。教師の指導が児童の姿に成果として表れてこと評価につながる。習慣化し持続するものとなるよう、連携と指導の継続をお願いしたい。			学校の対応	引き続き、研究大会に向けた取り組みからの学びを全教職員で共有しながら、専門性の向上に努める。協働したり能動的に仕事を勧めたりするなどして、勤務時間に対する意識の醸成を図る。ゲーム時間については、引き続き発達段階に応じた指導を行ったり、家庭への啓発をしたりして、家庭での適切な過ごし方ができるよう取り組む。							
年度末		学校保健委員会の内容や運営の仕方が、とてもよかった。保護者全員に聞いていただきたい内容であった。委員会後すぐに、タイムリーに保健だよりを発刊し、保護者にゲームとどう付き合うか子どもたちと話し合うよう働きかけることができたこともよかった。				学校保健委員会を受け、全校児童を対象に、学校医による「ゲームとの付き合い方」について学ぶ場を設けたことはよかった。しかし、家庭でのルール作りは6割にとどまっており、今後も学級指導の充実を図ったり、家庭への啓発に努めたりしていく必要がある。							

重点 目標	番号	評価指標	目標値	期間	評定	◇考察 ◆改善方策	評価資料	アンケート結果(%)				肯定率(%)	平均(%)
								4	3	2	1		
6 組織・運営、 家庭・地域との 連携	(19)	サービス規律を遵守し、信用の保持に努めたか。	教職員、地域住民の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇教職員も地域肯定割合が100%となっており、十分に目標を達成している。 ◆今後も職員会や研修会等を活用して、サービス規律の遵守と綱紀粛正、不祥事の根絶について確認し、徹底を図る。	教職員アンケート⑱ サービス規律の遵守	81.8	18.2	0.0	0.0	100.0	94.7
				年度末	A	◇教職員も地域も高い肯定割合となっており、目標を達成することができた。 ◆今後もサービス規律の遵守と綱紀粛正、不祥事の根絶についての徹底を図るとともに、保護者、地域の信頼を得る努力に努めていく。	地域アンケート⑤ サービス規律	78.9	15.8	5.3	0.0	94.7	
	(20)	学校の取組に対する情報発信と情報受信に努めたか。	教職員、保護者、地域住民の90%以上が肯定している。 毎月の学校だより、学年通信の発行、ホームページの更新の実施率が90%以上	中間期	A	◇毎月の学校だよりに加え、学級通信、保健だより等を発行することができた。ホームページについても毎日更新し、本校の教育活動を十分に発信することができた。 ◆ホームページ担当者だけでなく、学級担任等それぞれの分掌からの発信にも努めていく。	教職員アンケート⑲ 情報発信・受信 保護者アンケート⑰ 情報受信 保護者アンケート⑱ 情報発信	36.4	45.4	18.2	0.0	81.8	91.3
				年度末	A	◇肯定割合が目標値を超えているが、教職員と保護者アンケートの結果が90%を下回っており、学級通信等の発行回数之差が影響しているのではないと思われる。また、児童によっては、配布物が保護者に渡ってないことも考えられる。 ◆各種たよりは定期的に発行し、ホームページは、内容を充実しながらホームページ担当者だけでなく、学級担任等それぞれの分掌からの発信に努めていく。また、保護者に学校からの連絡等が届いているかの確認を徹底する。	地域アンケート⑥ 情報発信	85.0	10.0	5.0	0.0	95.0	
							学校だより、学年通信、ホームページ				100.0		
	(21)	地域ぐるみの学校運営ができて いるか。	教職員、保護者、地域住民の90%以上が肯定している。	中間期	A	◇教職員、保護者、地域に高い肯定割合を示しており、目標値を上回っている。コロナ禍で多くの制限が継続中ではあるが、感染対策を取ったり活動内容を工夫したりして、地域で学ぶ、地域から学ぶなど、地域ぐるみの学校運営ができていく。 ◆活動から得た知見を活かしながら、withコロナにおける地域との連携の在り方を探っていく。	教職員アンケート⑮ 地域との協力 保護者アンケート⑯ 家庭や地域との協力	18.2	72.7	9.1	0.0	90.9	95.5
				年度末	A	◇教職員、保護者、地域共に肯定率が目標値を上回っている。コロナ禍で制限のある中ではあるが活動内容を工夫して行事や活動を実施することができた。 ◆今後も、withコロナにおける地域との連携の在り方を探りながら、地域ぐるみの学校運営を行っていく。	地域アンケート④ 「生きる力」の育成	68.4	31.6	0.0	0.0	100.0	
	中間期	学校運営協議会の所見	「地域ぐるみの学校経営」における高い肯定率から、学校と地域の信頼関係が確立できていると感じる。学校運営協議会で話題となった登下校時の持ち物の重さについて、すぐに学校から具体的な情報発信がされたことは評価できる。今後も継続して、改善を図ってほしい。				学校の対応	コロナ禍においても児童の学びを止めないよう工夫してきた取組成果を、今後の教育活動に生かしながら、地域で学ぶ、地域から学ぶなど地域ぐるみの学校経営に努める。					
年度末			中間期同様、高い肯定率を維持していることは評価できる。地域ぐるみの学校運営の一つとして、公民館が子供の居場所づくりの一端を担えるよう、活動を充実させていきたい。地域が学校で指導することも大切であるが、児童がもっと地域に出て活躍したり活動したりすることができればよい。					今年度の活動をしっかりと振り返り、評価・改善しながら、引き続き地域力を生かした取組を、学校・家庭・地域が連携して行っていく。					
その他・ 自由意見	学校運営協議会の所見	夏季休業中に、ラジオ体操やちょボラ等に取り組む児童と保護者、地域の方の姿を見かけた。地域と家庭が一体となった子育てができている。				学校の対応	今後も青少年赤十字の取組を、家庭や地域へと般化し、学校・家庭・地域が一体となって児童の育成に取り組む。						
		登下校の声、休み時間の声が聞こえないと、非常に寂しく、どうしたのだろうと家庭で話題になることがある。子供たちは地域の宝。大切に育ててほしい。 登下校のお世話をさせてもらっているが、子供たちの成長の過程を見ることができてやりがいを感じている。					青少年赤十字の取組や成果を継承し、地域ぐるみの学校運営を行っていく。						